



## 「 掃除といのちのバトンタッチの関係 」

7月2～3日で「第7回 日間賀島 掃除に学ぶ会」が開催されました。我を忘れて、大つぶの汗を流して、しっかり便器と心を磨いてまいりました。

2次会はのり君と宮脇君という強力な宴会部の2枚カンバンをそろえて臨みましたので、前回に勝るとも劣らぬサプライズな2次会を演出することができました。

2日目の私の司会も、まあなんとか、ろれつが回らないながらも無難にこなし笑いあり、涙ありのトイレ掃除の会になりました。講演会は以前、テクアの安全大会でも講演していただいた鈴木中人さんの「いのちのバトンタッチ」でした。小児がんで娘さんを亡くされるまでの苦闘と、その中での命の大切さへの気付き。何度聞いても気持ちが洗われるのは、本来人は、「ピカピカの裸のままの命」をもっているにもかかわらず、それを恐れとか惰性とか慣れとかでごまかして、汚しながら生きているのではないかと気付かせて頂けるからでしょうか。以前、ある方から頂いたメールを紹介します。

--- 送信者： / 宛先： / 送信日時： -----

今夜は娘のことを書きたいと思います。

私の娘、N子は大学院を卒業して運良く第一志望の会社に就職。憧れの東京生活し始めて5ヶ月目に『中咽頭ガン』が見つかり、すぐに手術、下の右半分を切除しました。

すでにリンパにガンが飛んでいて、余命はハッキリとは告知だれませんでした。長くないことがわかりました。

本人はカルテも読めるし、お医者様になった友人を通して、全国の大学病院へインターネットでアクセスして論文を取り寄せ、自分の病気の情報は知りすぎていました。

本人は余命5年とっていたようです。実際は3年でお空へ帰っていきました。

娘が手術後、起きられるようになった時に一番最初にしたのは、資格を取る勉強でした。

資格を取るとお給料がアップする会社だったので、やりたい事をやるのに資金が必要だからという理由です。

次に今までやりたいけれど躊躇していたお稽古ごとを始めました。

フラワーアレンジメントやクラシックバレエやチェロなどの教室に通っていたようです。

それからちょっと気になる人のコンサートに片っ端から出かけました。

美術展にも。洋服もたくさん買い込んでおりました。きっとオシャレをして出かけたのでしょう。

海外旅行や温泉旅行にもお友達と出かけて、娘の手帳はスケジュールがぎっしりと書き込まれて残っておりません。

それからお友達や親戚や恩師にいろいろな物をプレゼントしました。お花、おかし、本、写真集、絵、干物や台所用品などその人が一番喜ぶ物を実に大勢の人に送っていたことが亡くなってからわかりました。

それから手紙を書いて送りました。これも驚くほどの数でした。亡くなってから多くの方に「手紙をもらったけれども、そんなに具合が悪いとは思いませんでした」と言われました。

手紙は亡くなる直前まで出していました。最後はペンを持つ力も無く、私に代筆させてまで送りました。

「 ちゃん、元気？ 私は元気よ。また遊ぼうね。」亡くなる1週間前の文面です。けっして具合が悪いとは書きませんでした。

危篤状態なのに「元気よ。また遊ぼうね」と書いてと言う娘の気持ちが辛かったです。

亡くなった月である6月生まれの人と、結婚するお友達みんなにお祝いのカードを送ったのが最後です。

それからアイバンクに登録していました。「本当は臓器のすべてをあげたいんだけど、私はガンだから、血液に乗って全身にガン細胞がばらまかれている。だけど、角膜には血液がいかないからあげらる」と。

そして娘の角膜でお二人の方に光が戻りました。

遺影も用意しました。顔がむくんで変形しないうちに用意したいと思ったようです。東京の有名な写真館で撮ったみたいです。臨終まぎわに娘のお友達が預かっていたと届けてくれました。

そして、すべてをやり終えて「私は普通の人より2倍遊んで、2倍勉強して、2倍仕事したんだから2倍生きたのと同じ。私は手抜きしないで生きたんだから、お母さん、泣いちゃダメよ」と言い残して旅立ちました。

就職してすぐに入ったガン保険があり、大金を持っていたはずなのに亡くなってから通帳をみたら見事に使い切っていました。主人と喜びました。

もしお金がたくさん残っていたら辛かったと思います。「良かったね、あの子は有効にお金を使って、やりたい事をちゅうちょしないでやったんだね」って。

告別式には500名を超える弔問のお客様があり、御悔やみのお返しが足りなくてあわてました。多くの方に惜しんでいただいていたうれしかったです。皆さん号泣して送ってくださいました。

娘は母親の作品だと言われますが、私は毎朝「N子はおかあさんの最高傑作だったよ」と褒めてあげます。

さて、そんな自慢の娘を持った私は死ぬ前に一体何をしたいのでしょうか。

メールをうちながら思い出して泣いていたのでは娘に笑われそうです。

---

ここに一つの真理がある。

彼女とわれわれとは、まったく平等に明日までの命は保障されていないという事実である。

彼女とわれわれの決定的な違いは、彼女は1日1日を、1瞬1瞬をかけがえのないものとして精一杯過ごしたのに対して、われわれは日々を取るに足りない不満や、他人への批判、自分への言い訳など、だらだらと薄められた時を浪費していることである。

今、この瞬間に命を燃焼させ続けること、お互いの足りないところを補い合い、助け合い、大きな丸い円(縁)を形作ること。人生にこれ以上なすべきことがあるでしょうか？

【羽原 篤史】

